

「子どもの貧困」は児童文学を利用しうるか

物語の「貧困」消費をこえて——

佐藤宗子

「子どもの貧困」という言い方が、二〇〇九年末の時点で、社会的にも一つの用語としてなりたつほどになっている。

この語を冠した書としては、浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編著『子どもの貧困——子ども時代のしあわせ平等のために』（明石書店 二〇〇八）が最初だろう。そして、似た語彙を使った山野良一『子どもの最貧国・日本——学力・心身・社会におよぶ諸影響』（光文社新書 〇八）、メイインタイトルが同じ阿部彩『子どもの貧困——日本の不公平を考える』（岩波新書 〇八）と新書刊行が続き、一気に概念が普及した感がある。その後も、藤本典裕・全国学校事務職員制度研究会編『学校から見える子どもの貧困』（大月書店 〇九）、浅井春夫『社会保障と保育は「子どもの貧困」にどう応えるか——子育てのセーフティネットを提案する』（自治体研究社 〇九）が出て、さらに大判の、子どもの貧困白書編集委員会編『子どもの貧困白書』（明石書店 〇九）

の刊行を見た。

子どもと関わるさまざまな現場の状況をよく知る執筆者たちの報告を見る限り、たしかにこの問題は深刻で、かつ解決は急を迫られていることをまざまざと知らされる。しかし同時に、もどかしさを強く感じることも確かである。政治や行政の前線に立っているわけではない、文学関係者にとって、この問題にどのように対処することが可能であるというのか。それはやはり、児童文学において「子どもの貧困」がどのようにとりあげられ、描かれてきたかを検証し、そこからさらに描かれる可能性を追求することに尽きるだろう。

本稿ではその手始めとして、社会問題を扱うこと、フィクションとすることに伴う困難について、そして具体的な作品検討を通してとりあえずの問題整理を行うこととする。なお以下では、「子どもの貧困」をめぐる問題を広く指し示す語として、「貧困」を用いることにする。